

経済マンスリー [原油]

～相次ぐ供給懸念が下支えとなり、原油価格は 80 ドル台へ上昇～

1. 価格動向

原油価格は上昇、
80 ドル台で推移

原油価格（WTI 期近物）は、9 月は 70 ドル台半ば近辺で推移していたが、月末には景気先行き懸念の後退を受けて 79 ドル台に急反発し、10 月に入ると供給懸念もあって 80 ドル台にレンジを切り上げている（第 1 図）。

9 月前半、原油価格は 70 ドル台半ばで推移していたが、米国や中国の経済指標が好調だったのに加え、米国やメキシコの石油施設の爆発、原油流出による米カナダ間のパイプライン閉鎖など事故が相次いだことから供給懸念が高まり、9 月 13 日には 77 ドル台に上昇した。その後は米加間パイプライン再開等を受けて再び 70 ドル台半ばに反落したが、9 月 30 日には景況指数など一連の米経済指標が良好な結果だったことから、景気先行き不安が後退し、原油価格は 77 ドル台へ急上昇した。10 月に入り、米中の堅調な経済指標や米ガソリン在庫減少に加え、年金改革に反対するフランスの主要石油港のストライキを受けて供給懸念が台頭し、原油価格は上昇、80 ドル台前半で推移している。

第 1 図：原油価格（WTI 期近物、終値）の推移



2. 需給、在庫動向

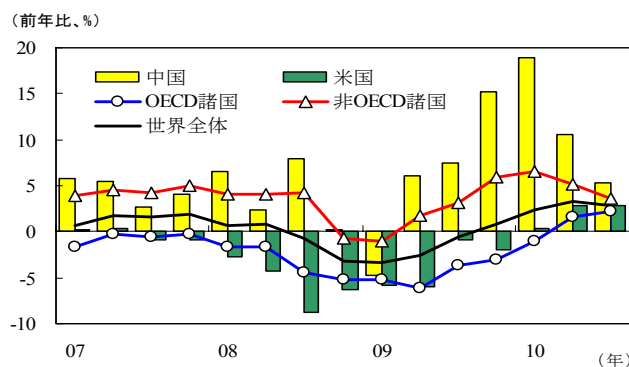
7～9 月期の世界の原油需要は前月予想を上回る

需要サイドについてみると、国際エネルギー機関（IEA）によれば、7～9 月期の世界全体の原油需要は前年比+2.8%と前期（+3.2%）から伸びは鈍化するものの、前月予想（+1.9%）を上回った見込みだ（第2図）。

先進国の原油需要の上方修正が主因であり、米州、欧州、アジア太平洋いずれの地域についても上方修正された。なかでも欧州は、2年間にわたり前年比マイナスが続いてきたが、ドイツにおける大幅な暖房油積み増しを受けて、+0.9%とようやくプラスに転じた。日本については、記録的な猛暑の影響でエアコン使用に伴う燃料需要が急増した。

また、新興国は+3.6%（前期+5.2%）と前期を下回るものの、底堅さを維持したと見込まれている。中国については、+5.3%とこれまで3四半期続いた二桁の伸びから鈍化した。しかしながら、9月の原油輸入量は過去最高を記録しており、旺盛な需要動向に著変はないとみられる。一方、ブラジルを始めとする中南米諸国については、今年中は+4～5%台の伸びで安定的に推移するとみられ、新興国の需要の下支え役となっている。

第2図：国・地域別の原油需要の伸び



(資料) IEA, Oil Market Report より三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

10 月 14 日の OPEC 総会では生産目標据え置き決定

供給サイドについては、10 月 14 日に開催された石油輸出国機構（OPEC）総会では、生産目標の据え置きが決定された（イラクを除く OPEC11 カ国の生産目標：日量 2,485 万バレル）。

総会後の声明では、「世界経済の回復に対する下振れリスクが依然大きいことを踏まえて、生産目標据え置きを決めた」とされている。足元の原油価格は概ね 70～80 ドルと、OPEC が満足するとされる価格水準で推移していたことも、据え置き決定の理由の一つとみられる。次回総会は 12 月 11 日に開催される予定である。

OPEC 減産順守率は低水準

これまでの減産決定の順守が加盟国に求められているものの、価格上昇を背景に OPEC11 カ国の原油生産量は増加が続いている。昨年 3 月に 83%に達していた減産順守率は低下基調をたどっており、最新 9 月の OPEC11 カ国の順守率は 54%と低水準にある。

10月12日、米油田開発凍結措置解除

4月に米メキシコ湾で起きた原油流出事故については、米政府は9月19日、油井の完全封鎖を確認したと発表し、5ヵ月間に及ぶ封鎖作業がようやく終息した。米政府は本事故を受け、11月末までの深海油田の新規開発許可凍結措置を発表していた。しかし、10月12日、新たな安全基準の順守を条件として、当初予定より早く凍結措置が解除された。新安全基準とは10月1日発表の、原油流出防止設備の義務付け等、油田掘削の安全性強化を求める新たな規制のことである。

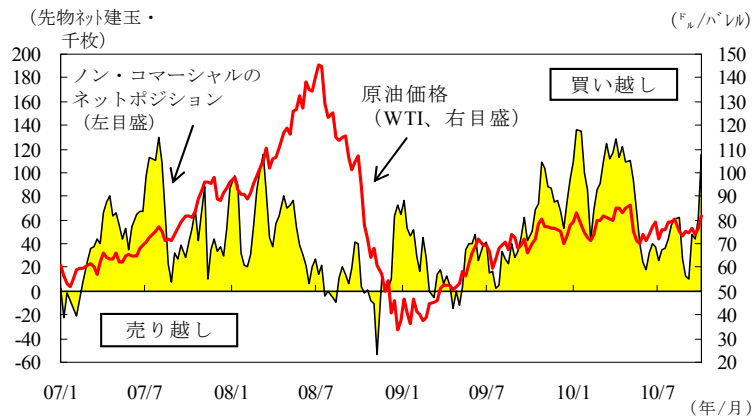
凍結措置が前倒しで解除された背景には、油井が完全封鎖され事態が収束に向かっていることがあろうが、11月2日の中間選挙を控えて、オバマ政権が沿岸地域の石油関連業界の雇用を配慮したのではないかと、政治的背景を指摘する向きもある。

3. 原油市場をめぐる資金動向

投機筋の買い越し幅は5月以来の規模に拡大

原油先物市場における投機筋の買い越し額は、8月下旬には世界景気減速に対する懸念が高まるなか、投資家のリスク回避の動きが強まったことから、買い越し額の縮小が続いた（第3図）。しかし、9月半ば以降、買い越し幅は急速に拡大し、最新10月5日時点では5月以来の高水準となっている。この背景には、主要国の良好な経済指標を受けて投資家のリスク選好が回復したのに加え、仏主要石油港のストライキによる供給懸念の高まりがあろう。

第3図：原油先物市場の投機筋ネットポジション



(注) ノン・コマースシャルとは、原油生産や精製に従事しない業者のこと。
1枚=1,000バレル。

(資料) 米国商品先物取引委員会、ニューヨークカンティル取引所 (NYMEX) 資料より
三菱東京UFJ銀行経済調査室作成

4. 価格の見通し

原油価格は80ドル
近辺の推移が見込
まれる

アジアを中心とする新興国経済は好調に推移している一方、主要先進国の経済指標は強弱入り混じっており、景気減速に対する懸念が払拭されていない。供給面では、OPECの生産余力は依然大きく、米国など先進国の原油在庫も高い水準にある。これらを踏まえると、需給面からの価格上昇圧力は高まっていない。ただし、足元では、仏主要石油港のストライキ等を受けて供給懸念が原油価格の下支えとなっている。原油価格は引き続き80ドル近辺の推移が見込まれる。

天候要因により一
時的に価格急騰の
可能性

NOAA（米国海洋大気庁）によれば、今年は「カトリーナ」が襲来した2005年以来のハリケーンが多い年になると予想されている。これまでのところ、ハリケーンによる石油関連施設への大きな被害は避けられているものの、11月末まではハリケーン・シーズンとされており、今後のハリケーンの発生状況次第では、供給懸念の高まりから原油価格が短期的に急騰する場面が予想される。

照会先：経済調査室 篠原 令子（原油）reiko_shinohara@mufg.jp

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、当室はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。また、当資料全文は、弊行ホームページ<http://www.bk.mufg.jp>でもご覧いただけます。